攪乱に咲く姫君

ホットココア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
攪乱に咲く姫君

【Ｎコード】
Ｎ２６７５Ｐ

【作者名】
ホットココア

【あらすじ】
ローズフランの王女レーネ・ローズは愛らしく元気な少女だった。美しく威厳がある王妃クリスティン・ローズ・フランシーズ、気弱だが誠実な王クルース・ローゼズ・フランシーツと兄のレクシオス・ローゼズに囲まれ、彼女は幸せな少女時代を送っていた。だがある日、ローズが１４歳のときローズフランは莫大な借金をかかえていて、不満をもった国民たちがとうとう革命を起こしてしまう。
革命の乱を逃れ、家族とバラバラになってしまったレーネ・ローズ

は数人の大人たちとともに世界中を革命の手から逃れるため渡る。

革命組織「デスター・ピリオ」に何度も命を狙われるが、あるとき一人の青年ミリアン・テールに救われる。彼と親しくなったレーネだったが、ヴァンパイア族のレイカーという美青年とも知り合う。兄のレクシオスとも再会し、喜ぶが両親が処刑されたことを知り、絶望に陥ってしまう。そしてある時ローズフランの王女だということが発覚し彼女は監獄へ送られ……。

第一話　王女レーネ

私が生まれた時、世界はなんと輝いていたことか。

私が少女だった頃、運命はなんと優しかったことか。

だが、私が１４歳になったときそれらはすべて私に背を向けた。たとえようもない愛が、目の前にあるものを焼きつくすほどの憎しみに変わったとき、きっと私の肉体も心も焼け落ちてしまったに違いない。

あのとき、父や母と死んでいれば良かったと思うときがある。そうすれば、視界を歪ませるような恐ろしい孤独と戦わずにすんだのだ。

＊

私がこの世に産声をあげたのは、たしか暁のころだったと思う。父と母はそんな私に、シリル語で「暁」という意味のレーネという名を与えてくれた。逆境にも負けない、闇に希望をもたらしてくれるような少女になってほしいという願いもたくされたのだ。私は今思えば願い通りの少女だったと思う。まだなにも知らない、無垢で純粋だった幼い頃は。

ローズフランの王女である私は、それは厳格に育てられた。たとえば古くからあるローズフランの礼儀として、人前で髪にふれないとか、握手は目上の人に求めてはいけないとか、あくびはしてはいけない、髪は一糸も乱れてはいけない、そして食事中に食器の音を少

しでもたてようものなら、宮廷中から非難を浴びた。
それでも私は幸せだった。
美しく優雅で威厳がある母クリスティン・ローズ・フランシーズ、少し威厳に欠けるものの、誠実な父クルース・ローゼズ・フランシーツ、魅力的な兄レクシオス・ローゼズといっしょに日々をともにできたからだ。

そう。家族の上に私の幸せが成り立っているといっても良かった。薄く、ちぎれやすいが酔っていられる夢のような幸福という文字。厚く、なかなか屈強でしつこい不幸という文字。この文字と、私は半世紀をともにすることになるのだが、それはまだ先の話である。

私が生まれてまもなく、母クリスティン王妃の母である祖母が亡くなった。噂話が好きなたちの悪い連中は私のことを「葬式王女」と呼んだらしいが母も父もそんなことに耳をかさず、とても私を可愛がってくれた。

兄のレクシオスも武芸や学問にすぐれ、まだ四歳で幼いながらもシリル語はもちろんのこと、ミシス語やバラリス文字もほとんど覚えてしまった。武芸の方では、6歳や7歳の周りの貴族の子たちに勝らぬとも劣らない力を発揮し、武芸の面では王子であるよりも騎兵隊長になった方が良いのではないかとよく冗談を言われたほどだ。おかげで彼はよく「隊長閣下」というあだ名で呼ばれ、そのたびにうれしそうに頬を赤らめていたそうだ。

ちなみに妹の私のあだ名は「マドモアゼル・アルファン」だった。「アルファン」というのはおてんばとか、威勢がいいとかいう意味で、「マドモアゼル」がつくのはませた嬢ちゃんという意味があるらしかった。
私はてっきりそれが王女の冠名であるかと思っていたので、6歳ご

ろになって真相を知るまで、ずっと自慢に思っていた。「マドモアゼル・アルファン」いや、「おてんばなおませ嬢ちゃん」と呼ばれて意気揚々と胸をはる自分はさぞ滑稽だったことだろう。あえてそれを指摘しなかった周りにも軽い憤りと水くささを感じることがあるのだが。

そんなこんなで、私たち兄弟は仲がよく、数少ない友達に夫婦といわれてからかわれたが、それくらい私たちは通じ会っていた。たまに喧嘩になっても翌日は手をつないで宮殿を走り回るのがオチだ。だから誰もとめる必要がなく手がかからないと言われたのを思い出す。

一回だけ、与えられたリンゴの数が平等じゃないといってたいしたことでもないのに私の生意気な口が火に油をそそぎ、周りの大人たちをまきこむ大喧嘩になったことがあるが、母さまの鋭い叱責によって火災は鎮められた。

そして翌日はためらいがちながらも罰である「城下禁止例」をともにうけ、私室でモーツァルトの（何の曲だったかは忘れたが）曲をピアノで奏でていた。レクシオスが最後の一小節をどうしても間違えてしまうので、音楽については得意な私が教えてあげた。レクシオスがピアノが上手なのは、ある意味私のおかげかもしれない。

さて、おてんばでませていると有名な私の性格はまさに「頭痛の種」で周囲を困らせた。
ままごとをしたいからといって、銀のスプーンやフォークを盗み出したり、リンゴが好きだからといって母さま自慢のリンゴの木からたくさん盗ったり、貴族たちのおかしなクセをまねしてみせたり、わざと通じない言葉で宮廷人に話しかけてみたり、たくさんのいた

ずらをしでかしたようだ。もちろんレクシオスも私の「遊び」にのって宮廷中を大いに困らせた。
ませているといっても、ただの屁理屈を連発する子供だったのだが、それがまた大人の痛いところをつくというので気を許してはいけなかったようだ。

でも、そんな私でも多くの人に愛されているのは手にとるようにわかった。
だから私もみんなを愛していた。

だがそんな幸福だった少女時代に影がさしてきたの１３歳を過ぎてからだったのを、私ははっきりと覚えている。そのくらいの年になると、周りは私の婿選びにやっきになっていた。レクシオスが王位をつぐのは明確だったから、他国と強く関係をもつために、王女である私は重要な駒となっていた。

幾度となくさまざまな国の王子や皇太子などが私の元をおとずれ、素晴らしい贈り物を届けてくれたが私にとってそのようなものは二の次だった。私はレクシオスのような才能にめぐまれた美少年でなければいやだった。レクシオスの側にいる王子たちはどうしても無愛想で平凡な少年に見えてしまい、私は困っていた。

なかなか私の目にとまる王子がいないことに父と母は当然あわてた。あらゆる国に使いをよこし、良い王子を捜させた。だが、私はしょせん無駄だろうと意地悪く考えていたのを覚えている。これまで会ってきた中でレクシオスほど美しく英才な王子は一人もいなかったのだ。
どの王子も気に入らない、と愚痴をこぼす私に対して母は業を煮やしたのか一度ならず怒ったことがあった。

「あなたは周りのことも考えないで自分の好みだけ優先しているのよ」

だけど、どんなに言われようが状況はあまり変わらなかった。
だが私としても「独身プリンセス」としての烙印がおされるのを恐れていた。おまけに国民の私に対する目も冷たかった。差し迫ったときには文句なしに強国の王子と結婚させられるだろう。
私はそのことについては人一倍神経質になっていた。

そして、いわゆる『革命』が色濃くなってきたのはこの頃からだ。

第二話　革命の炎

たしか、１２月の北欧ならではの寒い日、私達王家一族はとても街を歩けない状態になっていた。

城の下のあらゆる場所から反王政主義者が私達を罵る声がきこえ、窓には石がぶつけられ、街行く宮廷人達はほとんどが傷をつくって城にかえってきた。けれども彼らは私達への忠誠をくずさず、人々の迫害を恐れずに街へ出て行った。

恐らく、彼らの存在がなければ私達は今頃飢え死にしていただろう。そう思うと鳥肌がたつ。

そんな状態で３ヶ月がたったころ、とうとう国民達は総攻撃をしかけてきた。

赤色の帽子や服を身にまとった暴徒たちは一心不乱に武器をもって城に侵入しようとしてきたのだ。見つかったら間違いなく殺される状況のなかで私達は必死に変装して城を脱出しようとした。

だが一家がまとまっては危険なので３つに別れることになった。

まず母様と父様が、キース公爵とブランディス伯爵、ホクトーン公妃たち重役とともに城の裏側の秘密の出口から。レクシオスと彼の幼友達リューク・モンストンとモンストン伯妃、召使３人が地下にしばらく隠れて様子を見て脱出。私と乳母のポワトリン伯妃とリーン公爵と召使２人が地下道を通って脱出することになった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2675p/

攪乱に咲く姫君

2011年10月7日02時34分発行